



2017年9月20日発行（季刊）

特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社  
〒160-0021 新宿区歌舞伎町 2-19-13 A S K ビル 601  
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202

E-mail npo@hitomachi.org URL : <http://www.hitomachi.org>  
郵便振替口座 00170-6-410791 市民シンクタンクひと・まち社

## 旧満州への旅をして その1～幼い日の記憶をたどる旅～

市民シンクタンクひと・まち社理事 木下伸子

### プロローグ

私は、旧満州帝国（現中国東北地区）で生まれ4歳まで、その首都新京（現長春市）で育った。1945年の日本の敗戦で、翌年4歳の時、母と妹と3人で日本に引き揚げてきた。引き揚げに至るまでもいろいろ大変だったが、引揚げてくる道のりは、子ども心にも過酷なものだった。新京から無蓋貨車に乗り命がけで、錦州の葫蘆島（ころとう）まで行き、そこから引き揚げ船に乗り佐世保港に上陸、埼玉の父の実家までたどり着くのに41日かかったそうだ。列車で覚えている風景は、田圃だったのか原っぱだったのか、一面の緑。葫蘆島では収容所で迎える船が着くのを何日か待ち、いよいよ乗船できるという日は船着場まで、延々と歩いた。大きな手製のリュックを背負い、特大のト

ランクを提げ、一方の腕に妹を抱えた母に、迷子にならないようにと、晒でトランクにつなぐれ「落伍したら死ぬのよ」と言われ続けて、ベソをかきながら必至で歩いた。自分のものを入れたリュックを背負い、両肩にたすき掛けにした雑嚢と1升（1.8ℓ）入りの水筒が重かった。そんな光景は覚えているが実際の距離や時間・日数などははっきりとはわからない。育った街を見、無蓋車で見た景色、葫蘆島の港はどうなっているのか、体験を誰かに伝えるためにも、確かめに行きたいというのが私の長年の願いになった。少しずつ年齢を感じはじめ、行きたい思いは年々強まった。70年以上も経ったら当時の様子は残っているはずもないが…行きたい、やっぱり行こう！

### ☆ようやく実現

昨年、ついに思い切って、中国の旅行を専門に扱っている旅行会社にプランニングしてもらった。しかし現地ガイドを頼んでも、さすがに一人で行く勇気はなく、同行者を募ったが、申し出てくれる人はいなかった。ぐずぐずしているうちに年が明け、今年になって地元日中友好協会のメンバーになったMさんが一緒に行ってくれることになった。さらに出発近くなって、やはり協会メンバーで、長年市内で活躍している天津出身のYさん・Cさんの中国人夫妻が里帰りに合わせて現地で合流することを申し出てくれた。

6月11日（土）14：00成田発の中華国際航空機で、予定より30分遅れで、16：20大連空港着。ついに私の引き揚げ追体験の旅が始まった。

荷物を引き取り、出口から出るとガイドのK氏が待っており、長春行き的高速列車に乗る大連北駅に車で向かった。M氏は大連の旅行会社の職員、50歳代の男性、いかにも中国人という風貌で、とてもフレンドリーな人柄だった。



19：00 大連北駅発長春行きの列車で3時間余りの旅。既に日は暮れており、時速300kmを

超えて走る列車の車窓からは沿線の風景は見えない。車内はほぼ満員。外国人らしい乗客は見当たらない。K氏は季節の果物だと言って生のライチとサクランボを持ってきてくれ、冷凍しか知らない生のライチは珍しく彼のおもてなしは嬉しかった。明日からの日程などを確認しているうちに22：30長春駅に着いた。

（続きは次号）

